



## 「乗り越える力」、「折り合いをつける心」

学校長 小木曾敏樹

ここ十年くらいでしょうか、子どものトラブルに親が積極的に介入し、かえってこじらせてしまうというケースが市内でも多く報告されています。例えば、子ども同士のけんかにお互いの親が怒って親同士がトラブルになってしまい、子ども同士は仲直りしたがっているのに仲直りできないとか。例えば、いじめトラブルで、いじめた・いじめてないと、互いに親が我が子の言い分だけを信じて疑わないために平行線で解決に向かわず、学校の対応が悪いと担任を攻撃するようになったりとか。

子どものトラブルに親が介入してはいけないという訳ではありません。しかし、待つことはできるはずで。待つこととは、何が事実なのかをしっかりと聞き取ること、我が子には非がないのか見極めること、子どもの精神的な状態がどうなのかを正しく把握すること、子どもの力で解決できるかできないかを判断すること、どうすることがお互いの子どものためになるのかを考えることです。

いじめは勿論、けんかもトラブルもない方がいい。しかし、子どもは未熟なものです。トラブルはおきます。そのトラブルは子どもにとって大切な学びの場面なのです。

誰しも必ず経験してきたことです。ケンカをして腹を立てて、もうあんな子は友達じゃないなんて思って、でも、なにか寂しくて、本当は仲良くなりたくて……。相手が悪いと思いつつも、謝ろうかと思ってみたり、きっかけを探してみたり……。もしかしたら、自分のあの言動がいけなかったかもと自分を振り返ってみたり……。きっかけとなる一言が言い出せないまま、もんもんとした時間を過ごしてみたり、チラチラと相手を気にして見たり。結局、何となくお互いに謝って、以前よりももっと仲良くなれたりする。

この無駄に見える辛い時間、それは子どもにとって大きな成長の時間なのです。もう嫌だとか、相手が悪いとかの怒りや負の感情を、もう一度仲良くなるためにリセットさせようとして、さらにどうしたらいいのか方法をもんもんと考え、実行に移そうと努力する……。困難を乗り越える力、物事を解決していく力、人との円滑なコミュニケーションをとる力、そして、相手が悪いと思っても自分にも非があったのではないかと考え、心に「折り合いをつける」ということを学んでいきます。

人生は自分の思うようにはいかないものです。どこかで我慢したり、あきらめたり、違う方法を選んだり、本意ではなくても、それをよしとしなくてはならない場面に幾度も遭遇します。そこでくじけることなく、心折れることなく、前向きに物事をとらえて頑張るには、自分の心に「折り合いをつける」という力が必要になってきます。

自分の心に「折り合いをつけた」結果、仲直りできたり、どうするべきかを悩み考え続けた結果、もっと仲良くなることができたり、自分も悪かったかもと振り返ることができた結果、前より友達が増えてきたりと、苦しい経験がいい結果となって返ってきたときに、確かな成長となっていくものです。



## 親のその「怒り」は、何のため？

数年前に他市で起こった事件です。中学生数人が店に展示してある商品を粗末に扱い遊んでいたのを店員が注意したところ、逆切れして中学生がつかみかかった。店は警察に通報。ここは父親の出番と事件の解決に父親たちが登場。子どもたちを連れて店に謝罪に行った。ところが子どもたちの謝罪に誠意はなく、ふてくされた態度で小さな声で謝罪したので、店長が聞こえるようにちゃんと謝罪してほしいと言うと、その言葉にキレたのは何と父親。ちゃんと謝っているじゃないかと店長につかみかかったという。

この父親たちは何のために、何をしに店に行ったのでしょうか。初めから店長とやり合うつもりで行ったなら、問題外、話になりませんが、謝罪をして被害届を取り下げてもらはずだったのでしょう。本来ならば、店内での不適切な行動や暴力的な行為について謝罪させ、みじめでも何でも父親が深々と頭を下げ謝罪する姿を我が子に見せるのが教育的な行動だったはず。それが、なぜ真逆な行動になってしまったのでしょうか。もしかしたら、父親たちの目的が、被害届を取り下げること、子どもたちの反省や成長を目的としていなかったのかもしれない。

この父親や前述した保護者のように、親が感情的になってしまうのはなぜなのでしょう。子どものことを本当に思って感情的になっているのでしょうか。それとも、単に自分の感情がコントロールできなかったからでしょうか。結果から言えば、後者です。感情的になった結果、子どもはそれで救われてはいません。楽にもなっていません。逆に、解決を困難にしています。苦痛を長引かせています。子どもに非教育的な学びをさせた可能性もあります。

## 「自己解決力」を伸ばすために

親がしなくてはいけないことは、自分が怒ることでも興奮することでもないはず。まずは何が事実なのかをしっかりと聞き取ること、我が子には非がないのか、嘘や勘違いはないのかを見極めること。

次に、子どもの精神的な状態がどうなのかを正しく把握すること。そして、子どもの力で解決できるかできないかを判断すること。精神的にも、自力解決も無理と判断したならば、そこで親が介入することです。学校と協力したり、関係機関の力を借りたりすることもあるでしょう。それまでは、話をよく聞いてあげ、気持ちに添い、待つことです。

一番大切にしたいのは、どうすることが「お互いの子どものため」になるのかを考えることです。我が子が笑顔になることだけを考えていたら、間違った方法を選択するでしょう。

「お母さん、あのね、・・・。」子どもたちが親に学校であったことをお話します。うれしかったことも、面白かったことも、怒れたことも、悲しかったことも。話すことによって問題が整理され、子どもたちは無意識のうちにその解決手段を考えています。話すことによって心の中にたまっていたストレスも吐き出し、問題を解決するための心のパワーを蓄えます。話をしっかりと聞いてあげるということは、子どもの「自己解決力」を育むのを助けるとってもすごい行為なのです。

だとするならば、親が話を聞いてあげない、親が解決方法を指示してしまうというのは、子どもの成長を妨げているということです。ましてや親が感情的になることは、子どもの不安やストレスを増幅させることになり、問題を悪化させるわけです。怒ることより抱きしめること、話をよく聞くこと、ですね。

